

札幌市子ども・子育て会議
若者支援施設在り方検討部会

会 議 録

日 時：2025年3月5日（水）午前10時開会
場 所：大通バスセンタービル2号館2階 子ども未来局大会議室

1. 開 会

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） それでは、定刻より少し前ですがけれども、皆さんがおそろいになりましたので、第5回札幌市子ども・子育て会議若者支援施設在り方検討部会を開会いたします。

皆様、本日もどうぞよろしくお願ひいたします。

議事に入ります前に、本日も確認事項と報告事項を申し上げさせていただきます。

1点目は、会議の公開についてです。

当部会は、ご承知のとおり、公開で開催することとなっております、後日、札幌市のホームページに議事録を公開いたしますので、ご承知おきください。

それから、出欠状況でございますけれども、本日も全員にご出席いただいております、会議が成立していることをご報告いたします。

それでは、早速、議事に入ってまいりたいと思います。

議事進行は、永浦部会長にお願いいたします。

2. 議 事

○永浦部会長 よろしくお願ひいたします。

それでは、議事を進めてまいります。

次第にありますとおり、本日の議題は2件ございます。

1件目は、第4回部会における意見を踏まえた論点整理についてです。

前回の部会では、基礎調査で把握された課題をはじめ、五つの検討事項について、皆様から活発なご意見をいただきました。この間、事務局において意見を整理してもらいましたので、本日はまず、その内容を確認した上で、修正や補足などがあればご指摘いただき、論点、提言の骨格を固めていきたいと思ひます。

それではまず、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） それでは、資料1をご覧ください。

ただいま部会長からご説明がございましたとおり、前回頂戴したご意見を事務局で整理させていただきます。

進行の都合がございますので、資料説明はポイントを絞って行わせていただきたいと思います。

早速ですが、2ページをお開きください。

項目の一つ目は、学校等から離れた子ども・若者への支援の接続強化についてです。

この項目では、大きく三つの観点からご意見をいただきました。

まず、取組の必要性ですが、学校とつながることで支援を必要とする多くの子どもとつながる可能性が開けることから、学校との連携のさらなる強化がこれからの取組の大きな柱となるというご意見がございました。

一方で、学校になじまない子どももいるため、学校以外にもつながる経路を確保すべき

とのご意見もあり、この二つはともに必要な取組として併記をしております。

次に、具体的な接続の強化策ですが、現状においても、中学校卒業が近くなった時期に先生からパンフレットを渡してもらうなどの取組を行っておりますけれども、それだけでは弱いのではないかというご指摘がございました。

一つ飛びまして、現在は、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど、生徒や教職員を支える外部人材の方も増えておりますので、そうした方々にも若者支援施設の周知を強化すると接続が進むのではないかというご意見をいただきました。

また、先生や知り合いが紹介しても、やはり初めての場所、人のところに相談に出向く心理的なハードルは高いというご指摘がありました。スタッフが学校に出向いて行って、生徒等に顔と名前を覚えてもらうなどの関係をつくりながら、施設に誘導する取組は現在も行っておりますけれども、これを一層強化しないと確実な接続にはつながりづらい、一層の強化が必要だというご意見をいただいたところです。

3 ページに進みます。

不登校、通信制高校進学者、高校中退者が増えている中で、そうした子ども・若者が学びを続けていける環境づくりやサポートが必要というご意見です。

具体的には、情報の提供や学習面以外でのモチベーション維持などのサポート、また、自宅に落ち着いた学習環境がないケースには場所の提供も必要になるというご意見をいただきました。

続いて、4 ページをお開きください。

項目の二つ目、地理的・経済的事情から、若者支援総合センターの自立支援事業に結びついていない若者がいることに対する方策についてです。

まず、これまでの施設の変遷と今日の評価、基礎調査で把握されたニーズから、若者支援施設は次のステップでもさらに自立支援事業を拡充することが求められているというご意見がありました。

現状において、自立支援事業は、基本的に総合センター1館で行っておりますが、調査では、遠いためにつなげられないという意見も多く、これからは活動センターに拡充していく必要があるというご指摘をいただきました。

その場合の方策ですが、総合センターと全く同じ内容、規模で事業を実施することは財政的に難しいわけですが、オンラインは補完的な手段にとどめ、特に支援の入り口となる相談は専属のスタッフを配置して、空間と時間を共にすることを基本とするべきであるというご意見をいただきました。

5 ページに進みます。

項目の三つ目、ロビーの位置づけ・役割と、必要となるハード整備についてです。

最初に、ロビーの意義ですが、ロビーと、そこでスタッフが利用者に働きかけるロビーワークが若者支援施設における取組の大きな柱であり、極めて重要であることが繰り返し指摘されました。

今後、とりわけ重要になる役割、機能については、ロビーは、利用の目的が不明瞭な段階から誰でも受け入れるというところに大きな特徴がありますけれども、そうした方々を受け入れた後に、スタッフがロビーワークを行う中で、若者の内に潜んでいるSOSをキャッチする、あるいは、やりたいことを引き出して、自己実現を後押しする入り口の役割を果たしており、今後は、この支援の入り口の役割、機能が一層重要になるというご意見がありました。

利用者アンケートの分析からは、ロビーの滞在時間が長くなるほど、スタッフとの関わりが深くなり、より高次の支援を求める傾向があることが把握されております。

このことから、入り口からさらに高次の支援につなげていくことを目指すなら、ハード面でも長い時間快適に滞在できる環境の整備やスタッフと利用者とのコミュニケーションが活発になる仕掛けが必要になるというご意見をいただきました。

続いて、次のページになりますが、支援スタッフとの関係づくりを意識した、諸室等の配置、ハード整備の具体的な提案については、進行の都合上、読み上げを割愛させていただきます。

より分かりやすいネーミングについて、若者支援施設のロビーは、社会一般で用いられる意味合いと若干異なります。どのような場所なのかが一般の若者にも伝わるように、ネーミングにも工夫が必要ではないかというご指摘もいただきました。

7ページに進みます。

項目の四つ目、区の保健福祉部門との連携強化についてです。

自立支援を強化していく必要があることは、項目の2番目でもご意見をいただきましたが、若者支援施設自体の取組を強化することに加えて、関係機関との連携強化も合わせて行っていく必要があります。

とりわけ、住民に一番近い区の家庭児童相談室や生活保護部門との連携が重要になりますが、現状で必ずしも区側に若者支援施設の取組が知られていないことから、今後、広く認知され、連携を強化していくために具体的な方策を考えていく必要があるとのご意見をいただきました。

具体的には、これまでに連携事例が多い施設でモデル的な取組を行ってはどうかというご提案、また、現在問題を抱えているケースについて、区の保健福祉部門と若者支援施設のスタッフが一緒にケーススタディーを行ってはどうかというご提案をいただきました。

現地視察や他都市調査報告の中では、複合施設では連携がうまくいっているという話があったことを踏まえて、今後の施設整備において、区の保健福祉部門と若者支援施設の庁舎をどのように配置できるかも、連携に影響するというご意見も出たところです。

8ページをお開きください。

項目の五つ目、持続可能な施設についてです。

若者支援施設には、大きく自立支援、ロビー、貸室、交流・活動支援の四つの機能がありますが、それぞれの機能の今後の方向性についてご意見をいただきました。

まず、自立支援、ロビーについては、これまでの議論のとおり、今後、強化・拡大すべきというご意見を確認しました。

次に、貸室については、利用者アンケートの調査項目中、他の類似施設も利用している割合を見ると、貸室は、比較的、他の類似施設の利用が多い一方で、自立支援、ロビーは貸室よりも30ポイント以上少ない状況だったことから、持続可能性を考える上では、貸室をどうしていくかがポイントになるだろうというご意見をいただきました。

あわせて、仮に貸室を縮小するとなった場合には、若者が札幌市の類似施設を低廉な料金で利用できる方策をセットで考えていくべきというご意見、どこかの施設に入居するような場合であっても、最低限の専有スペースとして、ロビー、相談室、自立支援用の活動室、事務室は、確保する必要があるというご意見もいただきました。

さらに、これも仮定の話になりますが、現在地からどこかに移転することになった場合、現在、10代の若者の利用の交通手段は徒歩と自転車が多く、冬場は利用が落ち込むことから、経済的に余裕のない若者が冬場に少しでも来館しやすいよう、交通の利便性の高い場所への移転を検討するべきというご意見もいただきました。

9ページに進みまして、財政状況から、若者支援施設全てで現在の機能を維持することは難しいだろうが、総合センター1館だけでも全ての機能を残すことは考えられないだろうかというご意見もいただいたところです。

次に、交流・活動支援について、若者支援施設では、段階的で手厚い活動の支援を行っており、類似の取組を行っている施設はほかにはないと思われます。ハード面で、特別の施設・設備がなくても工夫によって提供できる機能でもあり、これからも周知を強化し、取組を続けていってほしいというご意見がありました。

最後に、その他の意見として、クラウドファンディングやふるさと納税など、財政面で市民の方から応援してもらおう仕組みを考えてもよいのではないかという意見もいただいたところです。

長くなりましたけれども、事務局からの説明は以上となります。

○永浦部会長 それでは、ただいま事務局から説明のあった論旨について、修正、追加のご意見があればご発言をいただいて、提言の骨格を固めていきたいと思えます。

修正や追加以外に、確認や、文言修正までは求めないけれども、関連してこの場で共有しておきたい事柄もあるかもしれません。議事の混乱を避けるため、ご発言の前に、これは修正意見です、これは確認です、これは追加して共有しておきたいというように発言の意図をおっしゃっていただけると幸いです。

それでは、順番にご意見を伺っていきたいと思えます。

1番目、学校等から離れた子ども・若者への支援の接続強化についてです。ご発言のある方はお願いいたします。

○工藤委員 工藤でございます。よろしくお願いたします。

大きな1番、2ページ、3ページについて、3か所あります。そのうちの2か所は文言

の修正をお願いしたい点、もう一か所は内容面について、もし加えることができたかと考えている点でございます。

まず、1点目ですが、文言の修正についてです。

取組の必要性の3行目、「一方で」の後で、「学校に馴染まない子どもや家庭もあるので」の「馴染まない」という表現が気になっております。なじむ、なじまないはすごくいろいろなニュアンスのある言葉なものですから、ここは、一つの例ですけれども、「学校とのかかわりが希薄な」という事実を表すようなことにしておいたほうが良いと思います。

なじまないのか、なじめないのか、学校になじまないと書いてしまうと、今は学校に通えない不登校のお子さんを学校以外のところで育てていくことが一つ大事ですが、一方で、学校も不登校のお子さんがより通いやすいように変わっていく必要があると思うのですが、なじまないと書いてしまうと学校が変わらないので、そこになじまない子どもや保護者になってしまうのが気になっております。

それから、2点目でございますが、その下の具体的な接続の強化策の二つ目にあります「生徒自身が、卒業よりも早い段階から、将来困ったときに支援してくれる」の「してくれる」という表現が気になっております。例えば、「支援を受けられる」みたいな感じのほうが良いのかなと思ったところでございます。

最後に、3ページ目の二つ目の「通信教育を受ける場所の提供も考える必要がある」は、そのとおりかと思っております。ご自宅で勉強に落ち着いて取り組める環境がなかなか得られないお子さんもいるのは私も聞いたことがあるので、大変ありがたい内容かと思っております。

さらに、もう一つ加えるのであれば、場所プラスそこに来て通信教育を受けている子どもへの人的サポートといえますか、分からないときに聞ける方、それに答えられる方がいるとなお一層いいかなと思ったところです。

○永浦部会長 今、工藤委員からご発言をいただいたとおり、こういう場所で会話をしていると、自然になじまない、支援をしてくれるという感じになるのですけれども、文章にすると多くの人が見るので、実際にこれから提言書を構成していくと思いますが、構成した段階でこういう書き方のほうが良いのではないかということは、その都度、皆さんからご意見をいただければと思います。

ほかによろしいでしょうか。

○大澤委員 委員の大澤です。

1番目の学校等から離れた子ども・若者への、支援の接続強化についての①の具体的な接続の強化策の4番目です。

「若者支援施設のスタッフが学校にアウトリーチし」と書いてあって、すごく大事なことだと思うのですけれども、こうやって書くだけで実際に学校に入っていけるかということ、難しいところがあるのではないかと思います。つまり、校長先生の理解があって、いいですよというところはこれで強化できると思いますけれども、校長先生や管理職があまり必

要性を感じていないところでは、別に結構ですというか、連携といってもなかなか進まないような気もしています。

学校と若者支援施設の連携を進めるために、例えば、札幌市が取組を進めるサポートをする、地ならしをするなど、そういう後押しがあってもいいのかなという気はしているのです。実際には、いや、そんなことを言わなくても学校とは全然連携ができますよというのだったら要らないと思うのですけれども、やはり難しさを感じているのであれば、若者支援総合センターに連携しなさいということではなくて、札幌市が学校と若者支援総合センターの間をちゃんとつなぐようなサポートをしていくことも必要ではないかと思っています。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） そのあたりは、松田オブザーバーから現状について感じていることを教えていただきたいと思います。

○オブザーバー（松田） 大澤委員がおっしゃるとおりかと思います。

現状では、子ども・若者支援地域協議会があって、教育委員会からもご理解をいただいでご連絡をしているのですという一文があると、校長先生にお伝えするときの一つ効力があると思います。加えて、もう少しそれが現場の先生方にご理解いただけると確かにありがたいかなというところでは。

あとは、教育委員会あるいは制度として札幌市が認めているけれども、保護者がうちの子の個人情報や外部と共有したことについて担任の先生に対してよからぬ感情を持つことについて、担任の先生が公的にオーケーだけれども、それでも、保護者の矢面に立つのが私たちだから言いたくないという事案もあると言われていきますので、そのあたりはもう少し時間がかかってくるというか、市民の感情の部分もあると思います。

今、大澤委員から指摘していただいたことが管理職だけではなくて、現場の第一線の先生まで伝わるような後押しは大変ありがたいかなと思います。

○永浦部会長 今のところに関連して、私も今のお話を聞きながら感じたところですが、修正というか、提案になるのですけれども、2ページの具体的な接続の強化策で、今、話題に上がっていたのが四つ目の初めての場所、人に相談に向かう心理的ハードルが高いから、スタッフがアウトリーチして関係をつくりながら、うまく施設に誘導していくことを一層強化しましょうというところですね。

ただ、アウトリーチだけの強化でどんどん進んでいくのもあるけれども、アウトリーチをすればするほど、なかなか行けなかったり、それが難しい場合、どうしたらいいかというところだと思うのです。

実際に提言書に書くのにどういう順番になるのかという話ですけれども、まず、四つ目のところが最初にあって、パンフレットを配付しているが、弱いと。それは、相談に向かうハードルが高いからであると。現在、アウトリーチをしているけれども、それを強化したり、ほかの方策をしないと接続できないのではないかと。結局、施設のスタッフが直接行く以外の方法として、この三つ目で、先生以外の支援の人たちも進められるような感じに

すると、今、松田オブザーバーからお話しいただいたように、学校から進めるとちょっと関係がな、というときに第三者的な機関が進めてくれる方法が出たり、五つ目のある程度の関係がオンライン上でできたら会いに行くみたいなほかの方策もあると、そんな順番にすると、アウトリーチ以外の方法も考えられますよというニュアンスで提言書が構成できるかなと思いましたので、お伝えさせていただきました。

ほかに、1について、ご意見等はいかがでしょうか。

○荒木委員 荒木です。今日もよろしくお願ひします。

後ろのほうにつながる話なので、ここではないかもしれないと思ったのですが、今の流れでお話しします。

学校などから離れてしまった子ども・若者の支援の強化ですから、もちろん私たち大人がどう手を差し伸べられるかということが大事だと思うのですが、子どもは大人が手を差しのべればのべるほど逃げていくのです。大人だから警戒してしまうところがあるので、最初の段階で子ども同士、同じような状況にある子たちが会える環境をつかって何もしないとか、何か別のアプローチがあるのではないかと思います。

この前、大学の集合型セミナーでこれから入学してくる高校生と会ったのですが、私はファシリテーターとしていて、学生たちがサポートする形だったのですけれども、困ったことがあるときに、私もいて、学生たちもいて、私が一番近くにいたのですが、入学予定の子たちは、私のところをすっと抜けて、無視して、学生のほうに相談に行っていたのです。そのときはすごくショックだったのですが、でも、そうなのだろうな、これが現実なのだなと思いました。

やはり、これから関わるときに、大人が手を差し伸べない場所をつくることも大事ではないかと思います。支援は、必ずしも大人が何かをしてあげるだけではないということも含めて考えたらどうかと思いました。

○永浦部会長 具体的な接続の強化策のところは、大人や専門家の支援ではなく、年齢の近い人間同士だったり利用者同士の関係を深めて、学校との関わりが希薄な子どもや家庭も支援に乗っかってみようかなと思えるような手だてがあるといいという感じでプラスできるといいのかなというご意見かと思いました。

ほかにございませんか。

○金委員 先ほどの委員の意見にプラスする話ですけれども、実際にピアグループを生かした支援は既にあると思うのです。そういう意味で、ピアグループのカウンセラーを育成するような取組は聞いたことがあるでしょうか。そのピアグループを進められる者を育成して、何かあったときにピアグループの中で相談ができるような体制は既にあるので、それも考えたほうが良いと思います。

○永浦部会長 具体的にピアサポートやピアグループも例として挙げられるのではないかなというご意見でした。

その辺の具体的な方法も、もしかしたら、提言書は提言書ですけれども、例としてもう

少し身近に分かりやすいように、こんなものを上げてはどうかということもこの部会の中で案が出せると、この提言書以外にもっと伝わりやすい形で伝えられるのではないかと思います。

例えば、私が思ったのは、この施設を使っている方で出てもいいよという方とちょっとしたショート動画で子どもが見やすく楽しそうだなと思えるような仕掛けをつくるなど、今までの部会の中で活発で面白い取組の案がたくさん出たので、皆さん、これからもいろいろ出していただけたらと思います。

ほかにございませんか。

○岩崎委員 岩崎です。

今、資料を見せていただきまして、2ページ、3ページで、子どもという語句がよく出てくるのですが、この施設は18歳以上、高校生以上の若者が利用する施設となっていて、子どもという表現に疑問を浮かべてしまいます。子どもという表現ですと、18歳以下の若者になる言葉だと思いますけれども、やはりここだと若者という言葉が適切ではないかと思ったのですけれども、皆さん、どう思いますか。

○永浦部会長 2ページ、3ページの子どもという表記について、事務局からお願いいたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） これについては、たたき台を調整した事務局からご説明させていただきます。

委員ご指摘のとおり、この資料の中では、若者と記載しているところもあれば、子どもが含まれる形で作成されている部分もございます。

私ども行政では、一般的に、「子ども」はおおむね18歳未満のお子さんを対象とする場合に使用させていただいて、若者という表現をさせていただくときは、明確な定義があるわけではないですけれども、多くの場合は、義務教育を終了した15歳以上を対象とする場合というふうに使分けをしております。

それで、特に1番目については、中学校卒業前後のお子さんを念頭に置いて施策を考えた資料ですが、中学校を卒業する前から知ってもらう必要があるというところに多くの委員からお話をいただいている、若者期になるもっと前から取組を始めることが有効であろうということを念頭に置いたものですから、子どもと若者を併記させていただいております。

ある程度上の年齢の方を念頭に置いた記載であれば、若者という書きぶりになるのですが、もう少し早い年齢から手だてとして考えていく必要がある部分については、子ども・若者という書き方をさせていただいております。

○岩崎委員 そういう規定があるのが分からなかったもので、今聞けてよかったです。そのまま大丈夫だと思います。

○永浦部会長 ほかにございませんか。

○オブザーバー（松田） 荒木委員からご指摘のあった2ページの具体的な接続の強化策

の四つ目の生徒等と関係をつくりながら、いわゆるピアグループの運営を通じて校内カフェ、つまり、関係をつくるプロセスはアウトリーチのスタッフと生徒個人の1対1ではないということがここに含まれていると思います。また、施設に誘導するというのも必ずしも1対1で施設に連れてくるではなくて、ピアグループを通じてその後の関係性を維持が含まれているので大丈夫とも言えるし、含まれている要素を文字出しすることも含めてあるかなということで補足いたします。

○永浦部会長 そうですね。

提言書も文書がメインになってしまうので、これは事務局に提案ですけれども、この提言書プラス、その後の段階でいいので、今、お話しいただいたことは具体的にはこんなふうに行っているということを見て分かるようなものがあると、市の皆さんにもすごく広がるのではないかと考えて聞かせていただきました。

では、忘れていたものがあれば戻ってもいいので、2番目に進んでいきたいと思います。

2番目、地理的・経済的事情から、若者支援総合センターの自立支援事業に結びついていない若者がいることに対する方策について、ご発言がありましたらお願いいたします。

私からお伺いいたしますが、括弧の三つ目の活動センターへの事業拡大の方策の二つ目の段落で、「特に『相談』を全面的にオンラインで代替することは、機能が低くなると考えられ、活動センターに自立支援事業を拡大する際には、専属の『相談』担当スタッフを配置することが望まれる」と書いていただいて、これが話題に上ったのも記憶しております。

実際の運営として、相談スタッフが活動センター全部に配置されるのはもちろん望ましいことではあるのですが、これは現実的に専門的な相談のスキルや資格を持った方が配置することは可能なのか、提言ですから望ましいでいいのか、このあたり、何か話題に上っていたか、私は記憶が曖昧な部分もあるので、今、どんな状況なのか、共有していただきたいと思います。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 今、相談の専属スタッフは、こちらの総合センターに配置しており、いろいろな資格をお持ちの方に従事していただいています。例えば、教員免許をお持ちの方、職業支援に強いキャリアコンサルタントの資格、心理士の資格の方などがいらっしやいまして、正職員の方も非常勤職員の方も含めて一定数の方がいらっしやる状況です。

そして、それが仮にこの提言の中で、総合センターだけではなくて、活動センターも含めて全ての館の配置が望ましいということになった場合、それが現実に財政上の措置ができるかについては、今後、札幌市の中で検討していくことですから、できそうにないから提言するのをどうしようかということは現時点では一旦置いておいて、あるべき姿としてどうなのかということをご意見としていただいて大丈夫と、ご回答させていただきます。

○永浦部会長 よく分かりました。

実際に提言をしても、現実の社会的な資本として難しいということは、札幌なので大丈

夫とは思うのですけれども、例えば、専門的な経験、スキルのある専門家がその土地にいないという遠隔地や年齢構成の問題で、そうは書いてあるのだけれども、難しいのだよなというところが出てきたりもするかなと思うので、今、聞かせてもらいました。

例えば、相談スタッフがいればその場でできるのですけれども、実際にロビーにいるスタッフだけでは難しいときに、ロビーの位置づけのところにも書いてある三つ目の入り口支援ですね。だから、入り口でとどめておいて、困っていることやそういう気持ちを傾聴、うんうん、そうなのだねと聞くところはロビーの機能であって、では、それを具体的な相談という形で何を目標にするかというステップで進めていきたいと思いますというときに総合センターにつなぐという2段階構えになっていますということが3番に書いてあるので、もちろん、全員が相談担当できるのが望ましいのですけれども、難しい場合はこういう対応もできますというところが、今、既にされているところかなと思うので、これは続けていいところかと思えます。

ただ、あまり縮小して言ってしまうと、それでいいのだとなってしまうので、望ましいとしっかり書いておくことが必要かなと思います。

ほかに、2番についていかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○永浦部会長 特になければ、3番に移りたいと思います。

ロビーの位置づけ・役割と、必要となるハード整備について、ご発言のある方はお願いいたします。

○荒木委員 質問ですけれども、ロビーとはどんな定義なのですか。

3の一番最後の行から2行目は「入り口（ロビー）」となっていますけれども、ロビーの定義、特にロビーワークにクォーターションマークがついているので、何か特別な意味で使われているのであれば知りたいと思いました。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） ロビーとロビーワークですが、私の中でも、法的なというか、一般的にきちんと言葉や定義が確立しているという認識には至っていないので、あくまでも札幌市が考えているという理解で受け止めていただきたいと思えます。

先にロビーワークからお話をさせていただくと、ロビーという、誰でも、目的が定まっていなくても、若者というくくりであればどんな人でも受け入れる、例えば、ぼうっと休憩したい方、誰かとお話ししたい方、自習したい方、どんな方も受け入れる場があって、居場所というふうに捉えていただければいいと思うのですけれども、そこで、例えば、自習しているから誰も話しかけないでという場合はもちろんそのままそっとしておきますけれども、何となく話しかけてもいいような状態であれば、その方々に働きかけをして、最初は普通に挨拶ぐらいからだと思えますけれども、言葉のやり取りをする中で、その方がここに来ることによって何らかのことを欲している、何かアクティブなことをしたいということ欲している場合もあるでしょうし、ちょっと話を聞いてほしいという場合もある

でしょうし、その方が積極的か消極的かはそれぞれですけれども、それを会話の中から引き出して、どこまで一度に進むかはそれぞれだと思いますけれども、何かやりたい、何か求めているものに対して一緒に考えていく、提案するという活動をロビーワークという、これは我々札幌市が思っていることですが、そういう意味合いで書かせていただいております。

何か補足があれば、松田オブザーバーからお願いいたします。

○オブザーバー（松田） 補足はないです。

今の表現を現場の言葉で置き換えるものになると思いますけれども、ある種、若者支援、ユースワークを象徴している場だなどと思います。つまり、フリースペース、目的、目標がなく、何しに来たのですか、いや、別に何となくということが認められて、そこにいい場所です。その中で、無目的、無目標で来たけれども、少し何かやってみようかな、こういうことを話してみようかなという目的、目標が生まれる場所で、その関わりをする場所です。

廊下との違いは、そこに座って何かしていても、ちょっと邪魔だからよけてと言われないう意味で、そこも含めて排除されない場所というか、そこに座っていていい、何もなくていい、機能的にも物理的にそういうイメージです。ロビーという言葉が合っているかどうかは分かりませんが、カフェと言ってしまうと、そこで何か口にするということにウエートが移ってしまうので、カフェという言葉は使わない、フリースペースというイメージです。

○荒木委員 私は各所の若者支援センターに何度もお邪魔させていただいて、やはり面白いと思うのは、確かに通路でもあるのです。だから、話しているところに貸室に向かって歩いていく人がいたり、たくさん人がいると何かかき分けていく感じで、例えば、昭和の闇市のような雑多で何をしてもどさくさに紛れて大丈夫というような、単なる第三の居場所とは別のもっと深い意味を見いだせるのではないかと今お話を伺いながら勝手に広げてみました。

○永浦部会長 一つ確認ですが、このロビーワークが日本の若者支援の活動の大きな特徴であると5ページの最初にあるのですが、このロビーワークやロビーは、札幌市以外の若者支援の中でも共通言語として通用するのか、しないのか、そのあたりが分かれば教えていただきたいと思います。

○オブザーバー(松田) 同じような仕事をしている人の中であれば100%通じますが、同じような仕事をしている人自体がものすごく少ないので、世間には通じない状況です。

○永浦部会長 これは修正というよりも追加の意見ですが、もし提言書でロビーやロビーワークが初めて公の文書に出るのであれば、やはりみんな言葉でイメージすると違ってしまう場合もあるので、何か定義として書けるといいのかなと思います。

恐らく、提言書では、この方向性の前に現況が記されますね。札幌市のスタッフの中ではロビーと呼ばれている場所があります。このロビーワークというものをここで定義して

において、では、このロビーワークが円滑に、かつ、より発展するためにはこういうものが求められると札幌市が最初に定義してしまいましたみたいな感じで書けるといいと思いました。

ほかにございませんか。

○金委員 このロビーは、最初に私が疑問を投げたので、はじめをつけたいと思います。

ロビーという言葉は若者支援センターで伝統的に使われている言葉ですから、それはそれでいいと思います。でも、ロビーというものを少し多重の意味合いで使ったほうがいいかなと思ったのです。

例えば、ロビーというものを愛称やニックネーム化して、ビジョンが初めて見える入り口、「ロ」は「ロ」と見えるではないですか。そのように、みんなが納得いくようなロビーという言葉はニックネーム化して使ったら、誰でも、あっ、そうだなということでもいいかなと思っていますので、アイデア提案いたします。

○永浦部会長 目からうろこでした。確かに、同じ「ロ」と「ロ」ですね。

このネーミングを強調して、最初にロビーと呼んでいるから、ここがもっとイメージしやすいようなネーミングが必要ではないかという論理展開になるかと思うので、強調して書けるとすごくいいなと思います。

ほかにも、3番目のロビーのことについていかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○永浦部会長 次に進ませていただいて、4番目の区の保健福祉部門との連携強化についてはいかがでしょうか。

(「なし」と発言する者あり)

○永浦部会長 では、5番目、持続可能な施設更新を行う上での、各機能の方向性についてです。

ご発言のある方はお願いいたします。

○荒木委員 私が理解していないだけですけれども、貸室の1項目めの「利用者アンケートで『他の類似施設も利用している割合』を調査しているが、『貸室』は比較的他の施設の利用が多い一方で、『自立支援』『ロビー』は『貸室』よりも30ポイント少ない状況だった」といった上で、「持続可能性を考える上では『貸室』をどうしていくかがポイントになる」という記載が続きますが、この記載が分かるようで分からないので、説明していただいてよろしいでしょうか。

○事務局(引地子どものくらし・若者支援担当課長) ここは、それぞれの機能の方向性をどうしていくかを考えていただく項目になります。方向性とは何かというと、拡大や強化をするか、維持するか、もしくは、縮小や廃止、今申し上げたいずれが適切かということ意見をいただくのが5番目の項目になりますけれども、それを考えていく上で、要は、貸室を拡大するか、それとも、維持するか、縮小するかをどうしていくかがポイントになりますねということです。

これは、発言いただいたものをそのまま文章に置かせていただいたのですが、委員の皆様からは、積極的な意見であればポジティブな言葉を使って表現していただきやすいと思うのですけれども、ポジティブではないものについて、皆様のお立場ではっきりご発言なさるのは難しいのだろうなと思っておりました。

○荒木委員 後ろをたどっていくと、そういう意味なのだなと理解できるのですけれども、この3行だけだと曖昧だと思ったのです。このままのほうが好都合というのであれば問題ないです。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 委員の皆様の総意として言い切りましょうということであれば、そういう修正もいたしますし、この程度の記載が適当ではないかということが皆様の総意であれば、このままがよろしいのではないかと思っております。

○永浦部会長 これは、数値的には30ポイント以上少ないとなったら、シンプルに決断を下すのであれば、縮小してもよいと考えるのです。

先ほど、私が3番のロビーで説明を求めたこともそうですけれども、もちろん、専門的なそれぞれの立場から委員として提言することは我々の仕事であるのですが、それが実際に実現可能だったり、社会になじむかどうかまで、私個人として考えなければ、それは我々が言ったままで終わってしまうと思っているのです。

ですから、皆さん、同じ思いなので、30ポイントで少ないから縮小でいいよねではなくて、次のページにもありますが、現在の機能の全ての維持、5館は難しいけれども、やはりロビーのほかに貸室があったから何か新しいことを始めようと思ったときに、では、貸室があるといって盛り上がっていった経緯だったり、では、どこか借りようかと言っている間に、来週になるならいいで止まってしまってもったいなかったと。

もちろん、数値としてはそうだけれども、我々も大きいケースではなくて、小さいケースだけれども、それを大事にする必要があるのではないかとということもあって、多分、あまり強く要りませんと言えないところもあるのかなと思います。

だから、具体的な書き方にはなると思うのですけれども、皆さんからもご意見をいただきたいと思います。持続可能性を考える上では、この中で一番縮小の可能性があるのは貸室と言えようと。ただ、縮小する場合に、必要なことは、その次の二つで、貸室のほかの施設がないと単純にいなくなってしまうと。

もう一つのポイントで、全部を縮小するのではなく、今まで貸室があるからこそ、さらに若者支援が進んでいったり好事例があると。ですから、5館全ての貸室ではなく、どこかでは貸室とその他の自立支援・ロビーが連携したようなモデルになる施設も必要になるかもしれないと。

この辺の具体的な書き方については、これだと伝わるだろうというものは今後の審議で我々委員の中でも話をしていけたらいいのかもしれないなと思います。

ここについて、何かございませんか。

○工藤委員 私の理解が間違っていたら教えてください。

このつくりは、要するに、アンケートの結果で、貸室はほかの施設で代替が可能である、一方、自立支援やロビーについては30ポイント以上少ないというのは、ほかの施設での代替ができない、可能性が少ないということを言っていると考えたときに、今は、貸室の充実よりも、自立支援やロビーの充実が若者支援施設には求められているのだという考えで合っていますか。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 今おっしゃっていただいたとおりのご理解いただければと思います。

○永浦部会長 ほかにございませんか。

○オブザーバー（松田） 荒木委員は、単純に、30ポイント以上少ない、多い一方というのは、どちらがどう多いという文章が分かりにくいということでおっしゃったのかなと思います。読んでいくと、こっちは代替可能という意味で、今、工藤委員がおっしゃったようにシンプルに、貸室は自立支援・ロビーよりも30ポイント以上代替可、他と併用しているという回答が多かったという、単に、文章上の分かりやすさなのかなと思いました。

○荒木委員 最初は、本当にシンプルに、これで通じるのかなと思ったのです。後ろを見ると、総合すると分かるけれども、文章として別の言葉はないのかなと思ったのです。

さっき、工藤委員のお話を伺って、例えば、この話をする前に、このアンケートの結果、自立支援、ロビーの必要性が問われたとあって、一方、貸室についてはという言い方でつないでいくことができるのであればいいのかなと思いました。

あとは、ポイントが違う意味で二つ並んでいるので、やはり分かりにくいかなと思います。30ポイントのポイントと、貸室をどうしていくかがポイントのポイントは、意味が違うと思うのです。

○永浦部会長 このあたりは、どういう書き方にするかは、また精査していければいいのかなと思います。

「『自立支援』『ロビー』は、『貸室』よりも30ポイント以上少ない」というのは、自立支援、ロビーはほかに変えの効かない求められるものであると。そうなると、したがって、持続可能性を考えて機能のある程度厳選するというのであれば、それぞれ自立支援・ロビーは強化拡大していく、これが1個目の部分で、2個目が貸室をどうしていくかという感じになるのかなと思います。結果、そこから考えられることをという書き方になっていくのかなと思うので、このあたりは実際の行政的な提言書の構成やそれぞれの立場での書き方で一番シンプルに伝わりやすいものを一緒に考えていけたらと思いますので、皆様もよろしく願いいたします。

ほかに、5番についていかがでしょうか。

（「なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 あとは、戻っていただいても結構ですけれども、全体を通して何かござい

ませんか。

(「なし」と発言する者あり)

○永浦部会長 特になければ、論点整理については、これで以上としたいと思います。

どうもありがとうございます。

では、続きまして、議題の2件目の提言書の構成(案)についてに移りたいと思います。

事務局から説明をお願いいたします。

○事務局(引地子どものくらし・若者支援担当課長) 緑色の資料2をご覧ください。

ただいま、熱心なご協議をいただきまして、提言書の論旨も大分固まってまいりましたので、今後、提言書の起草作業に着手いたします。

こちらは、その構成の案になります。

まず、はじめにの章で、在り方検討を行う背景、提言書の趣旨・目的を述べたいと思います。

次に、若者支援施設は勤労青少年ホームからの変遷を経て今日に至っており、提言でもそのことに触れますので、若者支援施設の設置経緯を説明する章を設けたいと考えております。

その次に、先ほど部会長からもお話をいただきましたが、提言の前提となる若者支援施設の現況を紹介する章を設けたいと考えております。ご覧の基本事項と、基礎調査のうち提言に特に関わってくる調査結果を抜粋して載せることを考えております。

次の赤色の枠で囲った部分が提言の本編の章になりますが、表現は今後の若者支援施設に望まれる方向性といたしたいと考えております。

(2)をご覧ください。

前回と今回の部会では、大きく五つの観点からご議論をいただきましたけれども、若者活動センターの機能拡大と区の保健福祉部門との連携は、ともに自立支援機能の強化を目指すもので密接不可分だと考えております。このため、提言書では一つの項目にまとめてはどうかと考えております。この場合、提言事項は、学齢期からの支援の接続強化、自立支援機能の強化、ロビー機能の強化、貸室機能、交流・活動支援機能の方向性の四つになります。

最後は、終わりにの章として、提言を踏まえて具体的な行政計画が策定されることを期待する旨を記したいと考えております。

本日、この後のご審議で構成の案も固まりましたら、事務局で提言書の素案を調整いたしまして、次の部会でまた委員の皆様にご確認いただきたいと思いますと考えております。

説明は以上でございます。

○永浦部会長 それでは、この提言書の構成(案)について説明をいただきましたが、ご意見、ご質問のある方はいらっしゃいませんか。

○荒木委員 さっきどこで挟んでいいか分からなくて終わってしまった内容で、少し戻るかもしれないのですが、ここでも何回もお話をしているのですが、今、札幌大学では、若

者支援センターのユースワーカーの方たちに全面的に協力をいただいて、大学生がもっとユースワーカーの役割を果たせるようにしようという取組の中で、私自身、ユースワーカーの存在がすごく大きいのではないかと感じているのです。

今回、ここにはユースワーカーという言葉が出てきていないのですが、きっちりと世界的な動きの中でユースワーカーの必要性を感じ取ったユースの皆さんがそういったものを背景にして体系的につくられた組織だと思いますので、もっと全面的に出してもいいのではないと思うのですが、松田オブザーバー、いかがですか。

○オブザーバー（松田） ありがとうございます。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 私たちに対する応援のメッセージだというふうに、大変ありがたく受け止めさせていただきました。

それで、今の熱い応援メッセージをこの中に入れようかと思ったときに、今回は、どちらかという、ハード整備が主眼の提言書の中に、ユースワーカーという人、ソフトの必要性をどう入れ込んでいくかというのは、委員のお話を聞きながらいつも思っていることです。

例えば、資料1の6ページ目の3番目のロビーの位置づけ・役割のところの一番最後に、その他のロビーに期待する役割のところにも人的なこともハード整備の設計上機能として入れ込んでいくようなことも考えておりますので、今、応援いただいたものについては、このような形で各章のプラスアルファの要素として書いていけたらと思っているところですが、いかがでしょうか。

○荒木委員 ぜひ、一言でもユースワーカーという言葉が入っているといいなと個人的には思いました。

○永浦部会長 私も同感でございます。

若者支援施設の現況の（2）若者支援施設基礎調査（結果の概要）のところ、アンケートの中で、スタッフの方との関わりがプラスになっているというエビデンスも出ています。それを踏まえて、この方向性にユースワーカーやスタッフがもっと今以上に活躍できるように絶対にこれは残してほしいと思います。ソフトの必要性があるからハードをこう整備しましょうというストーリーに構成できると、何で必要なのかと、札幌は若者支援をこんなに円滑にやっているのだなということも含めて何か伝えられるかなと思います。

我々は、こうなさいではなくて、ここまでよくやってくれてすごいのだよということをしつかりと伝えていきたいと考えています。同じ気持ちです。

構成について、ほかにございませんか。

（「なし」と発言する者あり）

○永浦部会長 では、この提言書の構成としては基本的にはこの流れで、書き方については、今上がった意見を含めて対応をお願いいたします。

では、本日の議事2点がこれで終了となりますので、進行を事務局にお返しいたします。

よろしくお願いいたします。

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） 部会長、ありがとうございました。

本日もたくさんのご意見をいただきましたので、ご意見を踏まえまして、提言書素案の調整に入ります。

スケジュール的な想定ですけれども、ゴールデンウィーク明けぐらいまでお時間をいただきまして素案の調整をいたしまして、次の部会を開催してご確認いただきたいと思っております。

それで、皆様もお忙しいので、この後の部会の開催形式が今までのような集合型がいいのかも含めて、またメールでご相談させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

3. 閉 会

○事務局（引地子どものくらし・若者支援担当課長） それでは、以上をもちまして、第5回部会を終了いたします。

本日も長時間にわたってご審議をいただきまして、誠にありがとうございました。

以 上